

芦城公園内
茶室

せんそうやしき
仙叟屋敷
ならびに
玄庵
げんあん

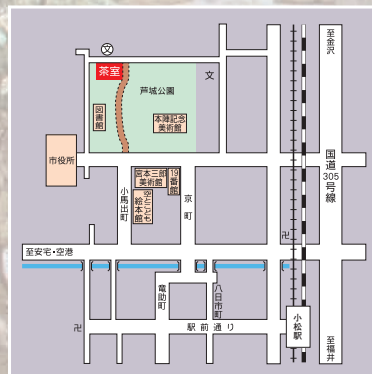
ごあんない



建築概要

設計 茶道裏千家第十五代家元鵬雲斎千玄室氏
規模 延べ面積45坪
(玄庵5畳半、広間12畳半、広間10畳、
水屋、台所、玄関、寄付、畳廊下、トイレ等)
構造 木造瓦葺平屋建数寄屋造
(瓦葺一部銅板葺)
竣工 平成9年(1997)3月24日
開庵 平成9年(1997)4月22日

案内図



交通案内

徒歩 小松駅より20分
タクシー 小松駅より5分
小松空港より10分

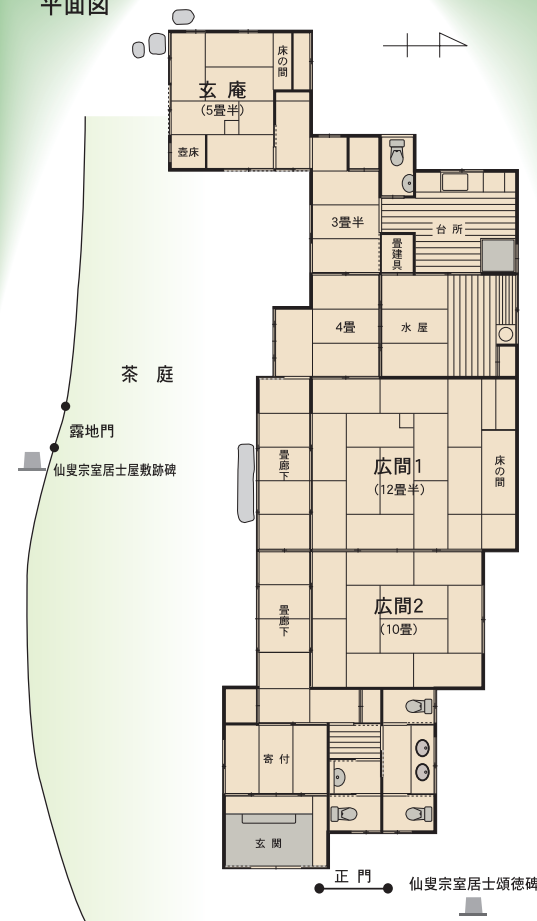
所在地

〒923-0903 石川県小松市丸の内公園町19番地
☎(0761)24-1656

問い合わせ先

〒923-8650 石川県小松市小馬出町91番地
国際文化交流部観光文化課
☎(0761)24-8130
<https://www.city.komatsu.lg.jp/>

平面図



使用時間 午前9時～午後4時

休庵日 毎週月曜日
(但し、月曜日が国民の祝日の場合はその翌日)
国民の祝日の翌日
12月29日～翌年1月3日

使用受付 使用希望日の
1年前から7日前まで
※見学無料(希望日の7日前までに要予約)

使用料 (仙叟屋敷ならびに玄庵)

使用時間	午前	午後	全日
使用施設	(午前9時から正午まで)	(午後1時から午後4時まで)	(午前9時から午後4時まで)
仙叟屋敷 (広間1・2)	5,200円	5,200円	10,400円
玄庵	10,500円	10,500円	21,000円

小松市



■茶庭の特徴

茶庭は、仙叟が加賀藩の士分であつたので、武家風の庭とし、しかも芦城公園の歴史的環境にわけ込むようにと設計されています。

広い庭園には、九つの景石を配して、仏教思想の“九山八海”を表現し、また大寄せの茶会に使われることが多いと考えてその配慮がなされ、さらに野点もできるように、工夫されています。

一方、露地については、外露地は明るく、内露地は暗くして茶事の趣が損なわれることのないようにされています。

なお、つくばい（蹲踞）の手洗鉢は小松城内で使われていたといわれています。

いずれにしても、茶室と庭園がかもし出す歴史的空間は、観る人、訪れる人、そして利用する人など多くの人たちに心の安らぎをあたえてくれるでしょう。

仙叟屋敷



■広間



■小間

■茶室の特徴

「仙叟好み」の趣を茶道裏千家第十五代家元鵬雲斎千玄室氏が現代風に設計されたもので、十二畳半の広間（床の間右に琵琶棚、左に床脇）と、小間の茶室「玄庵」は五畳半の上台目切りで、床は半畳の壺床と奥行の浅い台目床の二つの床からなっています。

また、玄庵には裏千家宗家の無色軒にある釘箱棚が写されています。

なお、屋根瓦と畳は小松市の特産品が使用されています。

玄庵



■茶室の由来

この茶室「仙叟屋敷ならびに玄庵」は、仙叟宗室居士没後三百年（1996）を記念し、茶道裏千家第十五代家元鵬雲斎千玄室氏が小松市への深い思い入れによって寄贈されたものであります。

千家四代仙叟宗室は、元和八年（1622）宗旦の四男として生まれ、幼名を長吉郎といいました。二十歳の頃、医師野間玄琢の弟子となり、名を玄室と改めましたが、玄琢没後、宗旦のもとで茶人として修行を続けました。

承応元年（1652）、加賀藩三代藩主前田利常の御茶堂として仕え、利常の小松城への入城に従って、城中三の丸に屋敷を賜わり、名を玄室から宗室に改めました。そして、利常が万治元年（1658）に亡くなるまで、小松に在って利常の文治政策を助け、家臣はもとより町人に至るまで、広く茶の湯を指導し、今日の北陸での茶道発展の礎を築かれました。

裏千家では、代々が家を継ぐと宗室を襲名しますが、代を継ぐまで、または隠居した場合、玄室という名になります。

この習いも仙叟の代から始まったもので、その由緒ある名の一字をとって、千玄室前家元自らが仙叟好みの茶室をゆかりのこの地に再建し、「玄庵」と命名、その遺徳をいつまでもしのぶことにされました。